



2度目の笑み



sanukisoba

「どうして思い出をそのままにしてくれなかった」

陳腐すぎるほどの言葉しか、言えなかった。

思い出として過去の君を記憶していることで、僕は現在の君を忘れていたことができたのに、君は一瞬でその努力を無駄にってしまった。

君は当然のような顔をして僕の前に現れ、そうするのが義務であるかのように微笑みかけた。10年前と同じ仕草で、同じ表情で。

一緒にすごしたこと自体は、後悔していない。けれど、出会ったことには激しく嫌悪を覚えるし、後悔もしている。君はあんな風に僕に近づくべきではなかったし、僕も君を受け入れるべきではなかった。

君と出会ったことで僕は大切な人を失ったし、彼はもう2度と戻ってはこない。その呵責から逃れるために、あの結果は仕方なかったのだと自分を説得するために、あの時期だけを切り取り、美化して自らを慰めてきたのに、君の微笑みはそのすべてを無に帰した。

友人は笑顔だった。

「まさかお前がそんなことをするなんてな。意外だよ」

8月の夏休み。大学に入り2回目の夏休みは十分に暇で、君と会うことくらいしか僕はすることがなかった。誰に話すこともなく始まり、続いていた君との関係は3年目に入っていて、もはや当然のものとなっていたから、僕はなんの疑問も感じていなかった。

いや、正確に言おう。君との関係を続けることにはなんの疑問も感じていなかったが、君との関係そのものは、常に罪の意識を伴って目の前をぶらついていた。

男2人で旅行に行き、1日中車を転がして宿に戻り晩酌を始めたところに僕は初めて、自分以外の人に君の存在を告げた。口元に持っていった湯呑みが口の前でとまり、溜息の混じる苦笑を見せ、湯呑みに入った透明の液体を流し込んだ。微かに酒の香りが僕にも伝わってきたような気がしたのを覚えている。

「悪いが、俺には、理解ができません」

僕は黙って続きを待った。

「お前は自分が何をしているのかわかっているのか。社会的にも許されないし、俺個人としても許しがたい。お前ら2人がどう思っているかが、美化しているかが、お前らのやっていることは穢れきったものにすぎん」

若さゆえの正義心と僕はそのとき友人の言葉に重きを置きたくなかった。「理解してもらおうとは思ってないよ」そう告げてから僕は、自分が思ってもいないことを口に出したことに気づいた。

沈黙が続き、友人は煙草に手を伸ばした。火を点けるときいつも顔をしかめる癖が、どこかいつもより印象的だった。僕は何かを言おうとしたが言葉は出てこなかったし、友人も何かを聞こうとはしていなかった。

希薄な沈黙が降り注ぎ、沈黙は徐々に厚みを増しながら部屋を覆う。

2本目の煙草に火を点けるとき、友人は笑顔だった。その笑顔の意味を知ったのは、知ったつもりになったのはその数日後だった。

「まさかお前が」

彼はその言葉とともに首を振り、名残惜しそうに紫煙を吐き出し煙草の火を消した。

心地好い香りが沈黙に取って代わり、部屋を満たしていく。

今でも僕は、友人が死んだのは何かの間違いじゃないかと思うことはない。あの結果は生まれるべくして生まれた結果であり、誰にも責任がなければ、僕ら2人にしか責任はない。

どうして友人があの日偶然君と駅のホームで会ったのか。なぜ友人が君のことを知っていたのか。理由は今でもわからない。

その日僕は寝ぼけた犬のように平和な休日をすごしていて、この広い世界のどこかで白刃が輝いていることなんて想像すらしていなかった。

包丁は君の家にあったものだし、君が刃を自らに向けたという話を僕は耳にしたことがある。君が自らに美しい切っ先を触れさせようとしたとき、友人が飛びかかったことも、はずみで友人が刃に魅入られたことも。

君がどのような説明をしたのか、僕は知らない。君は教えてくれなかったし、教えるもなにも君は僕の前からいなくなってしまったのだから。あの事故で僕になんの影響も及ばなかったことは、不思議で仕方がない。友人も君も、結果的に僕を守ったことになるのだろう。

僕が犬となっていた日に、何があったのか僕はわからぬままだった。

あれから10年が経ち、君は初めて僕の前に姿を見せた。どうして君は歳をとらないんだ、そう思いながら掛けるべき言葉を作り出そうとしていると、君は微笑を笑みへと昇格させた。

僕はそれでもどんな顔をしていいのかわからず、曖昧な足取りで君に近付いた。

「旦那とは別れたわ。時間はかかったけど」

心の中を乾いた風が吹き抜ける。冷たく、乾いた風が音を立てる。湿り気を帯びた沈黙が眼前で踊っている。その笑みは僕の記憶を鮮明なものにした。

大学に入りたての頃、同じクラスの女の子と喫茶店に行った。発表で一緒になり、図書館で調べ物をした後なんとなく流れて足が向いたのだ。

ブレンドコーヒーのお湯割をさらにお湯で割ったようなアメリカンと、泡の海を誇らしげに浮かべたコーヒーのミルク割り。そして青いパッケージの長い煙草と灰皿。僕らの前にあるのはそれだけで、それらの上空を他愛ない言葉たちが行き来する。

言葉たちが行き来のたびに高度を上げ巡航高度まで達すると、オートパイロットに身を委ねた僕らは、笑顔を交わす余裕が出てきた。正直に言えば、君との関係では決して味わうことのできない開放感を僕は味わっていた。

「私の前で、あんな風に笑うことはないのにね」

君はそう言って僕を責めた。

最初で最後の君と僕との喧嘩。

取り乱すことなく、年上の威厳と余裕を感じさせながら、僕を責めた。今までの僕の言動や、僕の口から出る大学生活の話、クラスの女の子の話題。すべてが君の頭には記録されていて、君の口からは僕の「悪事」が小川のように穏やかに、とどまることなくあふれ出てきた。

「あなたが私を好きだって信用させて」

君はひととおり喋り終わるとそう告げた。君の怒りは、沈黙と流れが交互に訪れる不思議なものだった。向かい合って、君が口を開いたのは恐らく沈黙の時間の1割にも満たないだろう。僕はただ、謝り、君は、沈黙を貫いた。

どうやって君と仲直りしたのかは、覚えていない。でも、君が涙を流さなかったことと、時間が止まりそうなくらい君が笑顔だったことは覚えている。

「次は、許さないから。あなたも、あなたを笑顔にする人も」

僕は頷いたはずだ。

2人の距離が縮まった。君が一步踏み出したことに気付いたのは、君が口を開いてからだ。

「もう、誰もいないのよ」

君の笑顔を、あの笑顔を、僕は再び目にすることになった。

「大人になったんだね。あどけなさが消えてる。私の知ってるあなただけど、私の知らないあなたになったのね」

季節が急に変わったように、音が一切なくなった。汗ばんだシャツが、まとわりつく暑さが、存在を失っていく。

君は昔と同じように優しく僕の頬に触れた。寒さの中じっと待っていたかのような手が、頬の温かさを奪っていく。

「どうしたの。久しぶりに会えたのに」

不安そうな表情で笑うその顔に、その目に、次々と記憶が引き出されていく。

あの頃の君は「態度で察して」と、事あるごとに口にした。好きなこと嫌なこと、自分から口に出そうとしない君の感情を読み取るために、すべての意味を表情から探ろうとしていたあの頃。読み取ることができなくて君を不服そうな表情にさせた日々。

心の奥に隠しておいた何かが、あっけなく飛び出して来る。

「10年ぶり、かな。ごめんね」

凍てつくような目をして君は不満を表現した。定期的に蓄積された不満が、唯一の感情表現である目を通して明らかになる。

僕は言葉で不満を表現した。その度に君は言葉を失い、体調を崩した。

笑顔も見たし、不機嫌な目も見た。

君と会うのは、家から遠く離れた街の喫茶店で、君と過ごすのは君の家族から遠く離れた部屋だった。他の誰の目にとまることもなく、僕らは、相手の表現を、発された感情を、すべてもらすことなくお互いに受け取らざるを得なかった。

他の誰かが2人に関わることを、表現と感情を受け取ることを君は何よりも嫌っていた。

僕は気付かないうちに君の手を頬から引き離していた。あの頃とまったく同じように君は不満を表し、僕を見つめた。

「なぜ」

辛うじて僕が出した言葉に、すべての音と正しい季節が呼び寄せられる。

「好きだからだよ。あなたと離れたくないから」

あの日の前日に、友人は僕に電話をかけてきた。連絡してくるものの少なかった友人は、淡々と言葉を重ねていった。

「俺は、誰かに罵られたとしても、自分がすべきことをしたいだけなんだ。なかなか理解されないとしても」

何かあったのか、と尋ねたが答えは聞けなかった。

「悪いな。こんな時間に」

短い通話だった。

「本当はあのとき言うべきだったのよね」

聞きたくなかった。笑みから逃れたかった。

「彼はね、私たちのことを誤解してたの」

感覚が勢いよく失われていく。

「あなたと別れるくらいなら、死んだ方がましよ。そう言って」

「殺したんだろ」

笑みから不純物を取り除かれ、澱みのないものになる。

「そう思うのなら、それでいいの。2人を邪魔するものがなくなったその結果だけで私はいいのよ」

友人の笑みの意味が、ようやくわかったような気がした。恐らく僕も笑ったのだろう。君は僕の腕をとった。いつものように、当たり前のように。

「あなたは、邪魔しないでね」

感覚を失った僕は、感情すら失いつつあった。